

日文研のこと

井波律子

私が、金沢大学から日文研に移ったのは、今を去ること二二年、一九九五年四月だった。当時の日文研は創立後八年のまだ若い組織であり、創立以来のメンバーが大半を占めていた。建物の大部分は完成されていたが、周囲の環境や風景は現在とはまったく異なっていた。

京大の大きなキャンパスのある御陵坂のあたりは、広漠とした荒野のようであり、今や日文研のすぐ間近まで迫っている住宅地も、雑草の生い茂る空き地だった。私の研究室は南棟の一階だったが、まだ日文研ハウスが増設されていなかったため、窓から、荒野のかなたの山まで見渡すことができ、眺めていると、晴れ晴れと解放された気分になった。

このように、日文研は野原に忽然と出現した別天地の観があったが、建物の構造もゆったりとしながら、うまく考えられていた。たとえば、研究室からどこかへ行こうとすると、必ずコモンルームを通らなければならない仕組みになっており、ここには、だいたいいつも雑談に興じる人々がいた。ちょっと慣れると、いつのまにやら私もごく自然に座り込んで、雑談に加わるようになった。

当時の日文研は創立当初の熱気が残っており、ごく普通の大学から移って来た私にとって、運営システムがあるのやら、ないのやら、何とも把握しがたいところがあった。かてて加えて、いろいろな意味でめったにお目にかかれないような、変わった人々も多かった。そんな不可

思議なことも、あれこれ雑談しているうちに、何となく雰囲気として理解できるようになった。日文研はこじんまりした組織だが、メンバーそれぞれの専門分野が多岐に渡っており、雑談のなかで、未知の分野の話をいろいろ聞くことができ、耳学問ができるのも面白かった。

日文研に移って二ヶ月後、少しずつ馴染みかけたころ、初代所長の梅原先生が退任されて、河合先生が二代目の所長になられ、六年間、在任された。この間、私はますます日文研に馴染み、自然体といえど聞こえはいいが、要するに、ありのまま、思いのままに過ごすようになった。

私事ながら、私は子供のころ向こうっ気が強くて喧嘩っばやく、事を起こすことも多かったが、大人になるにつれて、めんどろなことは関わりたくないと思うようになり、よほどのことがないかぎり、思いどおりに振る舞うことは控えるようになった。しかし、日文研暮らしが長くなるとともに、子供時代に帰ったように、いたって率直に思ったことを口にするなど、楽な気分でごく自然に過ごせるようになった。これは、何ととっても、日文研の肩ひじ張らない自由な雰囲気のおかげだと思う。

プライベートな面では、最初、桂の公務員宿舎に入ったが、半年後、小学生時代に住んでいた西陣界限のマンションに転居、さらに五年半後の二〇〇一年春、銀閣寺近辺のマンションに引っ越した。西陣に転居したころ、なぜか金沢にいたころに比べて、一日が三時間ほど短く感じられ不思議だった。考えてみれば、そのぶん通勤時間がかかるようになったのであり、日文研は別天地ですばらしいところだけれど、遠いのが難だと痛感した。とはいえ、そのうち、もともと町育ちなので、デパートや繁華街を通過して別天地に向かうのも面白いと、思えるようになり、二〇〇九年春に定年退職するまで、何とか元気に通勤した。

というわけで、公私ともども、慌ただしい日々がつづいたが、けっきょく日文研には、

一九九五年春から二〇〇九年春まで一四年間、お世話になった。この間、日文研にとって、いちばん大きな転機はやはり二〇〇四年の法人化だったのではないかと思う。それまで単独の機関だったのが、機構のなかに入ることになり、会議の議題もにわかが増えて難解な用語が飛び交い、何事においても手続きが複雑化した。こうしたなかで、日文研の長所（ときには短所にもなるが）である、ノンシヤランな自由さを保ってゆくのは、至難の業だと思われるが、今はただ健闘を祈るのみだ。

個人的には、ちょうど法人化のころから、九〇を越えた老母の老化がめだつようになり、定年までの数年間は家のことに追われて、コモンルームや喫煙室で、ゆっくり雑談する時間もだんだん少なくなっていた。母は私の定年後一か月、九五歳で他界したが、定年の間際は何かと忙殺され、日文研で過ごした一四年間の感慨にふける余裕もなかった。定年退職して八年になんなんとする今、思い返してみれば、むしろ楽しいことばかりではなかったけれども、それも含めて、「日文研は面白かった」と、思うばかりである。

（国際日本文化研究センター名誉教授）